

公共空間における集団活動とソーシャルキャピタル形成について

-日本の「ラジオ体操」と中国の「広場舞」の比較から-

20年後を生きる子どもたちのためプロジェクト TEAM

南正華, 影山映里, 梶山周, 倪双, 包雪峰, 石原光彩

人は様々な方法で社会と繋がりを持ちながら生きている。しかし現在の社会情勢を見ると ICT や AI の発展によって、直接的に社会との繋がる機会が失われている。このようなことを背景とした生きがい喪失による高齢者の引きこもり等も社会問題となっている。「社会との繋がり」「生きがい」を語る際、注目したい概念がソーシャルキャピタル（以下 SC）である。SC の先行研究の多くが公共空間のありように着目しているが、国内の公共空間のみに焦点を当ててもそれを相対化する視点は得られない。そこで、公共空間における SC 形成について日中比較を行なった。対象は日本における「ラジオ体操」と中国における「広場舞」である。この調査結果をもとに SGH 推進校である G 高校において、先入観の捉え方や新たな価値の創造について理解を深める授業を行った。授業後のアンケートから高校生に新たな視点や多文化理解について考える機会となったことがうかがえた。

Keywords : 公共空間, 日中比較, 価値観, ラジオ体操, 広場舞

1 課題設定と目的

それぞれの専門性を生かした課題を設定するため、当初「非認知能力」についてのプロジェクトを立てた。しかし、非認知能力の定義の広さや調査方法の限界、対象者の選定などからテーマ変更を行うこととなった。その際に重視したことは、「メンバーの出身地の多様さ」「我々自身の興味・楽しさ」「ワクワク感」である。テーマ設定の話し合いでは、留学生の日本に対する疑問や興味に焦点を当てることで、日本の教育や価値観を相対化することとした。結果として、日本と中国の公共空間のあり様や活用方法に、大きな違いがあることがわかった。

そこで今回、日中それぞれの公園で行われる「ラジオ体操」¹⁾及び「広場舞」²⁾の活動について調査を行い、それぞれの SC³⁾形成について考察を行うことを目的とした。またそこで得られた知見や、我々が活動していく中で体験した経験や苦難等をもとに出前授業を行い、高校生と国際的な観点への興味や多文化理解のための留意点などを共に考えることを第2の目的とした。

2 方法

(1) 公共空間に関する調査

今回の調査では、現地視察及び口頭インタビュー、対面式アンケート調査を行なった。アンケートの内

容として SC 構成要素と考えられる集団自体に対する項目（集団フォーマル性尺度、新井、2004）とそれらの集団に属す人個人に対する項目（対人志向性尺度、斎藤・中村、1987）を設けた。

対象者は大阪城ラジオ体操に参加している人 63 名及び、上海市青浦区白玉蘭広場で広場舞を行なっている 77 名である。

日時は大阪：2019 年 11 月 02 日午前 5 時 30 分～午前 10 時 30 分、上海：2019 年 11 月 22 日～同月 24 日までのそれぞれ午後 6 時～午後 10 時までである。

(2) SGH 推進校における授業

2020 年 02 月 08 日、G 高校 1 年生を対象に授業を行なった。授業時間は、50 分×2 コマの 100 分間であった。授業後、Classi による授業評価アンケートをフィードバックとした。

また授業者は、調査を行なったメンバーの内 4 名で日本人 2 名、中国人留学生 2 名である。

3 調査結果

公共空間の使い方の中で、運動を行なっている点で共通しているラジオ体操と広場舞を比較した結果、それぞれの特徴が明らかとなった。

ラジオ体操では、音楽が流れ始める時間が決まっているため定刻に合わせて人が集まっていた。顔馴

染みや参加期間が長いメンバー間では挨拶程度の会話が見られた。また体操中の会話やコミュニケーションはほぼ見られず、個人でしっかりと身体を動かしている様子であった。大阪城本丸広場では、大きく3つのグループに分かれて活動していたが、大阪城ラジオ体操協会会長によると、元は1つの集団であったが、人間関係の乱れから分裂が起きたという。終了後はラジオ体操協会のスタッフが片付けを行うが、それ以外の参加者は速やかに帰路につくといった特徴が見られた。一方、広場舞では、開始時間がバラバラ(±15分)で実施時間が長いことから、徐々に人が集まっていた。活動が始まると、気が済むまで汗を流しながら体を動かすといった様子であったが、時には自由に談笑や余暇を楽しむ様子も見られた。常に人が流動的に動いており、出入りは自由であることがうかがえる。インタビュー結果によれば上海市青浦区白玉蘭広場での広場舞は3つの集団からなっている。こちらも元は1つのグループであったが「暖簾わけ」の形をとったようだ。その中の1人の女性が全てのチームのカリスマ的存在となっており、広場舞の振り付けを担っている。彼女が自主的に統率を取ることはないが参加者から特別視されていることは間違いない。終了の合図等は無く、スピーカーの所有者が帰る時が終了といった様子であった。



図1 ラジオ体操の様子



図2 広場舞の様子

アンケートの結果をもとにSPSSを用いて分析を行なった。結果として集団フォーマリティ尺度、対人

志向性尺度ともに各因子において日中に有意差は認められなかった。インタビュー内容、現地視察及びアンケートの自由記述欄からの質的考察はまだ途中段階であるが、インタビュー調査から現段階で明らかになっていることを記す。

日中の調査協力者に共通するのは、広場において体操やダンスを行う第一の目的は、健康増進であるということである。また、健康増進だけでなく、家族以外の人との関わりを求めているということであった。つまり、日中両国の調査協力者は体を動かすことや家族以外の人と話をする機会を持つことで、家庭などで生じる日常のストレスを発散するなどといった精神的な健康を保つ場所として認識していることである。日本と中国には、国民性や文化などといった背景の違いは多くあるものの、今回のインタビュー調査を通して明らかとなった相違点としては以下2点を上げる。

1点目は「歴史」である。ラジオ体操は、1928年に文部省が任命した7名の体操公安委員により国民全体の健康を願って作られた体操である。それに対し、広場舞は設立当初から、健康増進と娯楽の両方を目的として中国に広められているということである。この目的が浸透していることは、両国のインタビュー調査でも明らかであった。日本で行ったインタビューでは、会長への参加の目的を問う質問に対し「もう、もちろん健康」、「ラジオ体操は真剣にやっている」という返答を得た。それに対して、中国のリーダーへのインタビューの中では、「チームで衣装を統一する」、「自分がダンスする姿は美しいと思う」、「ダンスの振り付けは自分で創った」等と、エンターテインメント性を生かしたSCが醸成されていることがわかった。

2点目は、集団の組織化である。日本のインタビューにおいて、リーダーとして心がけていることを問う質問に対し、「集団をまとめていかなあかん」、「私のいうことをみんなが聞いてくれはる」という回答がある。このように、日本の会長には参加者を一つの集団としてまとめようとする姿勢がうかがえる。一方、中国においては一部の社交ダンスなどパートナーを必要とするダンスなどを除いては、広場舞を開催するに当たって、音響などの必要な設備を管理する体制に対する問いに対して「全部一人で管理している」のように、役割が明確化しているわけでもなく、自由に参加をすることができる体制であると考えられる。そのほか、広場舞に関しては、中核となる人物がダンスの振りを創るなど、自ら楽しもうとしているとともに、参加者が無料でダンスを学習することができるという点も魅力として認識され

ていた。

上記した様に質的考察からはSCの醸成についての違いが示唆できると思われる。しかしながら現段階では分析及び考察が完了しておらず明確な答えは得られていない。

4 G 高校での授業

(1) 授業作り

まず、授業では我々PBLチームがどのような経緯を経て今回の調査に至ったのか、また多国籍かつ年齢も専門も違うメンバーがどのように合意形成しプロジェクトを進めてきたのかその具体的な内容を伝えることを重要視した。我々のチームビルディングの過程や留学生の語りから、グローバル教育をする上で有意義であると考えたことがその理由である。多国籍チームのありのままの姿が、身近なモデルとして高校生の学びに繋がることも意図した。

具体的な内容は調査結果から、アンケートによる量的調査では有意差が認められなかったことも授業内容の重要な点として盛り込んだ。一見すると全く性質の違う人々が構成する集団において実際に調査をしてみると結果的には差がないということは、多文化社会における「先入観」や「イメージ」の扱い方について考えるきっかけとなりうると考えたからである。社会との繋がりや幸福感、楽しさなどは客観的に評価することは難しく、評価は調査をもとにしたエビデンスを必要とする点を強調した。このような考え方をもとに授業を構成した。

(2) 授業内容

「国際比較研究を知る」、「豊かさとはなにかを考える」を目的とし、PBLの研究成果をもとに、グループワークを行うという授業形態をとった。日本人1名、中国人1名というチーム構成とし、2クラスに分かれて授業を行った。本チームの特性を活かすためにも、各国の文化や制度の比較を通して、先入観の捉え方や、価値の創造をベースにおいて講義を構成した。具体的には、日本の社会問題である、日本の高齢化社会の現状、孤独死の増加、急激に進む核家族化や孤独死の増加である。これらの社会問題に対し、課題を設定し、改善策の提案をすべく実施した。本研究の内容としては、日本の大阪と、中国の上海にて行ったフィールド調査の現状報告や、異なった国籍や研究課題を持つ仲間との協働研究の難しさと意義を説明し、日中それぞれの公共空間の様子(映像資料)から「豊かにする」ものが何か、そもそも「豊かさ」とは何かを考えるグループワークを実施した。



図3 グループワークの様子



図4 授業の様子

(3) 授業の振り返り

授業終了後、「授業で勉強になったこと。発見できたこと」、「本日の授業の感想」についてClassiを用いてアンケートを実施した。アンケートの回答を下記に記す。

「授業で勉強になったこと。発見したこと」に関する回答は以下の通りである。国際比較により、自国や中国への理解が深まったという趣旨の回答(15件)、客観的に物事を見ることの難しさを学んだという趣旨の回答(4件)、豊かさとは何かを深く考えた(14件)、そのほか大学院への理解が深まった(2件)、グローバルな時代にグローバルな視点を持つことができた(1件)、豊かと教育の関係について考えた(1件)。

「本日の感想」に関する回答に関しては、中国に対する国際理解が深まったことと、豊かさについて考える機会ができたことに関しては、ともに8割を超える生徒が感想として記載している。そのほか少数意見として、自分の国を離れて初めて自分の国の課題に気づくと感じた(1件)、まずはイメージを持つことが大切という言葉から、将来の夢をしっかりと持ちたいと考えた(1件)、世界の課題に興味を持つきっかけとなった(1件)、研究の面白さを知るきっかけとなった(1件)等という感想も見受けられた。

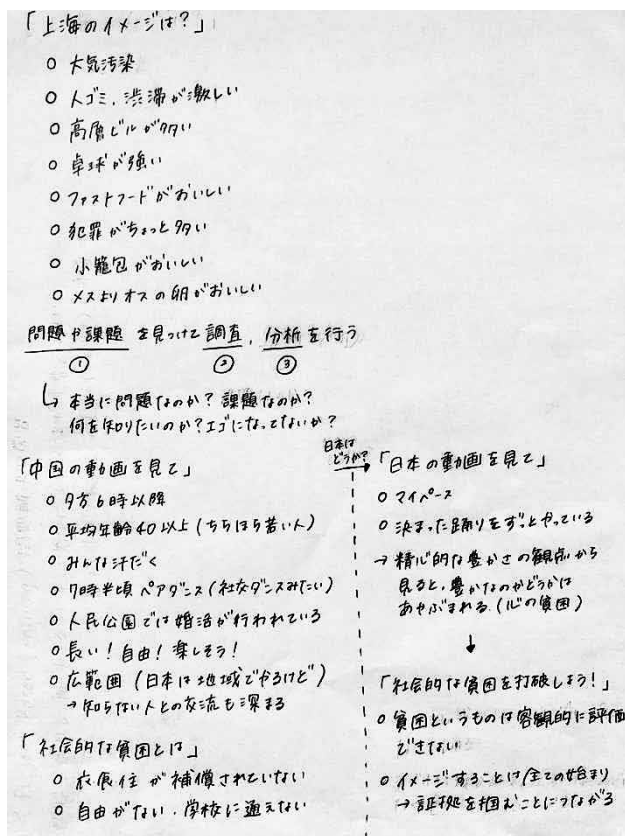


図5 自由記述のメモ用紙

5 まとめ

本プロジェクトでは、日本におけるラジオ体操と中国における広場舞についての質的及び量的調査をもとに組織間の比較を行い、SCの形成について考察した。結果的に量的調査では、有意差が認められなかったものの、今後質的考察を深めることで新たな知見が生まれるだろう。またPBL活動全体を通して得られた経験や知見をもとに授業を行ない高校生と共に「豊かさ」「価値の創造」について考えることができ、それに対してのフィードバックも得ることができた。これからの社会を担う高校生にこれらの学びが蓄積されたことは有意義であったと考えられる。

注釈

1) ラジオ体操の歴史

黒田(1999)によると、ラジオ体操はアメリカの生命保険会社の健康事業を参考に作られた。簡易保険局が中心となり、「国民保険体操」として1927年に始まる。その後、国内の情勢は軍国主義的な色彩が濃くなり、ラジオ体操は国民精神総動員の重要な体育運動として位置付けられ、太平洋戦争中は半強制的にラジオ体操の参加が推奨されることとなった。敗戦後GHQによりラジオ体操は国民の挙国一致の

精神高揚に加担しているとして干渉を受けたが、翌年1946年より放送が再開されている。

2) 広場舞（広場ダンス）の発展背景

高春梅ら(2015)によると、広場舞の発展理由として大きく4つの理由が挙げられている。1つ目に中国経済の発展、2つ目に物質的需要が満たされた人々の精神的需要、3つ目に広場舞のそのものの特徴（精神的な文化生活を豊かにする機能を持っていること）、4つ目に「一人っ子政策」による中国独自の事情である。この様な社会的背景を受けて、現在中国全土で取り込まれている。ただし、騒音の問題などもあり、当局によって禁止されることもある。

3) ソーシャルキャピタル

ソーシャルキャピタルの概念はロバート・帕特ナム(2001)により定義された物的資本や人的資本などと並ぶ新しい概念である。『人々の協調行動を活発にすることによって、社会の効率性を高めることのできる、「信頼」「規範」「ネットワーク」といった社会組織の特徴』と定義されている。内閣府によると欧州(OECD、英国、アイルランド)におけるソーシャルキャピタルの認識は政策効果や経済・社会にとって非常に大事なものとして位置付けられているという。帕特ナムはソーシャルキャピタルの蓄積により、子供の教育効果の向上、近隣の治安の向上、経済発展、健康と幸福感の向上、民主主義の機能化・よりよい政府の実現などにつながると指摘している。